

地理学におけるルーラルツーリズム研究の展開と可能性

ーフードツーリズムのフレームワークを援用するためにー

菊地俊夫

首都大学東京 都市環境科学研究科

本研究は、農村地理学におけるルーラルツーリズム研究の将来的な展望と可能性を明らかにすることを目的とした。農村地理学におけるルーラルツーリズム研究は、農村の存在形態と関連して、ルーラルツーリズムの実態に関する静態分析から、ルーラルツーリズムがもたらした地域変化の動態分析へ、そして近年ではルーラルツーリズムによる農村環境の保全とその持続的な利用システムの分析に変化した。このような研究の潮流は、農村地理学が生産主義のフレームワークからポスト生産主義のフレームワークで議論されるようになったことと呼応している。ポスト生産主義のフレームワークでは、農村の多様な環境や資源が注目され、農村の多様性と多機能性が評価されている。ルーラルツーリズムの研究でも農村の環境や資源の多様性と多機能性を総合的に議論するフレームワークが必要になっており、本研究はフードツーリズムのフレームワークの援用を検討した。

キーワード：ルーラルツーリズム、ポスト生産主義、持続的農村システム、農村再編、フードツーリズム

I はじめに

近年、農村における環境や地域資源の保全、あるいは社会や経済の活性化の方策の1つとして、ルーラルツーリズムが注目されている (Greffe, 1994; Luloff et. al., 1994)。このような現象は先進国の農村だけでなく、発展途上国の農村でも多く見られるようになった。しかし、従来のさまざまな研究においてルーラルツーリズムが明確に議論されてきたとはいえず、その定義や範囲、あるいは農村地域における位置づけや役割は曖昧のままであった (Lane, 1994)。そのため、本研究はルーラルツーリズムの定義と範囲、さらには農村地域における位置づけと役割を明確にし、ルーラルツーリズムが地理学、特に農村地理学の対象としてどのような課題をもっているのかを議論することにした。また、本研究は一連の議論を通じて、農村地理学におけるルーラルツーリズム研究の将来的な展望や可能性も検討する。

ルーラルツーリズムという術語はアグリツーリズムやファームツーリズム、あるいはグリー

ンツーリズムやエコツーリズムという術語と混同して用いられることが多い。ルーラルツーリズムは農村という領域で行われる観光行為や観光アトラクションのすべてを含む概念で、アグリツーリズムやファームツーリズム、およびグリーンツーリズムやエコツーリズムを内包している (Lane, 1994; Sharpley and Sharpley, 1997)。アグリツーリズムは「農村の環境と産物に関連しながら生産活動と直接に結びつく」ツーリズムであり (Jansen-Verbeke and Nijimenge, 1990)、農産物直売所の訪問や農産物の直接購入、あるいは農業体験などが典型的なアトラクションとなっている。ファームツーリズムは「農家や農場と直接関わるツーリズム」を意味しており、ファームステイを中心に農村の生活文化を体験するアトラクションがその典型である。

一方、グリーンツーリズムは日本のように農村 (緑地) におけるツーリズムを意味することもあるが、一般的には伝統的なマス・ツーリズムに比べて、環境により優しいものと考えられるツーリズムの形態を指している。その意味で、グリー

ンツーリズムは自然環境と社会環境との間の共生関係を目指したものになっており (Budowski, 1976), エコツーリズムに近似した意味で用いられることが多い。エコツーリズムは農村における環境や伝統的な地域資源, あるいは生活文化の保全・保護を進め, 地元の社会や文化にとって直接の利益となり, 積極的に教育的な経験の場を提供するようなツーリズムであるが (Whelan, 1991; Hvenegaard, 1994), すべてのルーラルツーリズムやグリーンツーリズムがエコツーリズムになるわけではない。しかし, 農村に浸透してきたマス・ツーリズムの有害な影響は農村の環境や資源, あるいは伝統的な生活文化を蝕み, ルーラルツーリズムにおけるグリーンツーリズムやエコツーリズムの視点は重要なものとなりつつある (Cater and Lowman, 1994)。

本研究はルーラルツーリズムを本来の定義に準拠して, 「農村で行われるすべてのツーリズム」と広義に捉えた。しかし, ここで問題となるのはルーラルツーリズムの範囲となる農村の意味であり, それは国によっても人によっても異なっている。一般には, 農村は大きな都市や町以外の地域であり, 都市とは正反対の性格をもつものと定義されている (Hoggart et. al., 1995)。そして, 国や地域によって事情が異なるが, 農村は人口密度と規模, 土地利用と経済活動, および社会構造において都市と異なる地理的性格をもつ領域である (Marsden et. al., 1993)。つまり, 農村は都市住民が非日常的とみなすことができる自然環境や社会・経済環境, および歴史・文化環境の領域であり, それらの非日常性がルーラルツーリズムの対象となっている (Halfacree, 1995)。ルーラルツーリズムの研究がツーリズムの議論だけにとどまらず, 農村のさまざまな環境や地域資源, および経済活動を総合的に議論しなければならないのは, 農村におけるすべての要素が都市住民にとって非

日常的なものとして捉えられ, ルーラルツーリズムの対象になっているからである。以下では, ルーラルツーリズムの展開と関連づけて農村の動向を検討する。

II ルーラルツーリズムをめぐる農村の動向

1. ヨーロッパにおけるルーラルツーリズムの背景

ヨーロッパにおけるルーラルツーリズムの原点は, 上流家族や貴族が郊外の農村で乗馬や狩猟をしたことにあった。そのため, 収穫後の農地は狩場となり, 狩猟用の野生動物を確保するため, 動物の生息地としての森が農地のなかに分散して保全された。このように, 特権階級の人々は農村での乗馬や狩猟を心身のリフレッシュの手段にしていたが, 一般の人々が農村で心身をリフレッシュするようになるのは産業革命以降であった (Cavaco, 1995)。産業革命以降, 多くの余剰労働力が工場労働者として農村から都市に流入し, 近代工業が都市で発達するようになると, 人々は余暇やレクリエーションを身の回りの自然のなかに求めるようになった。それは, ルソーの自然回帰思想の影響でもあった (菊地, 2008)。

他方, ヨーロッパ諸国では法定年次休暇 (バカンス) 制度を背景にして, 給与所得者は安い費用で長期休暇を過ごすことができる自然豊かな場所として農村に注目するようになった (Adler, 1989)。ヨーロッパ各国の農村人口は, 現在, 人口全体の 10% 程度であるが, 20 世紀初頭までは 40% 以上を占め, 現在の都市住民やその祖先は農村出身者であることが多い。そのため, ヨーロッパの人々にとっての農村は「ふるさと」, あるいは伝統的な生活文化と経済活動に基づく「牧歌的情景 (ルーラルティ)」を意味することが多く, 彼らの「牧歌的情景」へのまなざしはルーラルツーリズムを促進させる原動力となった (Halfacree,

1995)。実際、フランスにおけるセカンドハウス（別荘）の分布をみると（図1）、セカンドハウスは地中海沿岸や大西洋沿岸の海浜リゾートとアルプスの山岳リゾートに多く分布していたが、パリやリヨンなどの都市周辺の農村地域にも多く分布していた。これは、都市住民が週末に郊外農村のセカンドハウスに滞在し、農村生活を体験・実践することにより心身をリフレッシュするルーラルツーリズムの発展を反映していた（Comite National de Geographhie, Commission de Geographie Rurale, 1984; 山崎ほか, 1993; 多方ほか, 2000）。いわば、都市周辺農村におけ

る週末型別荘の立地はルーラルツーリズムがヨーロッパの観光の一つの形態として定着していることを示している（Harrison, 1991）。

ヨーロッパ各国の国土の半分以上が林地を含む農村であることも、ルーラルツーリズムの発展基盤として重要であるが、ルーラルツーリズムの発展は都市化・工業化にともなう農村の衰退を契機にしていたことも事実である。20世紀後半のヨーロッパでは、都市と農村の経済格差が工業化や都市的産業の発展、および農産物価格の低迷によって大きくなり、農村の人々はより多くの収入を求めて都市や都市的産業に雇用を求めるようになった

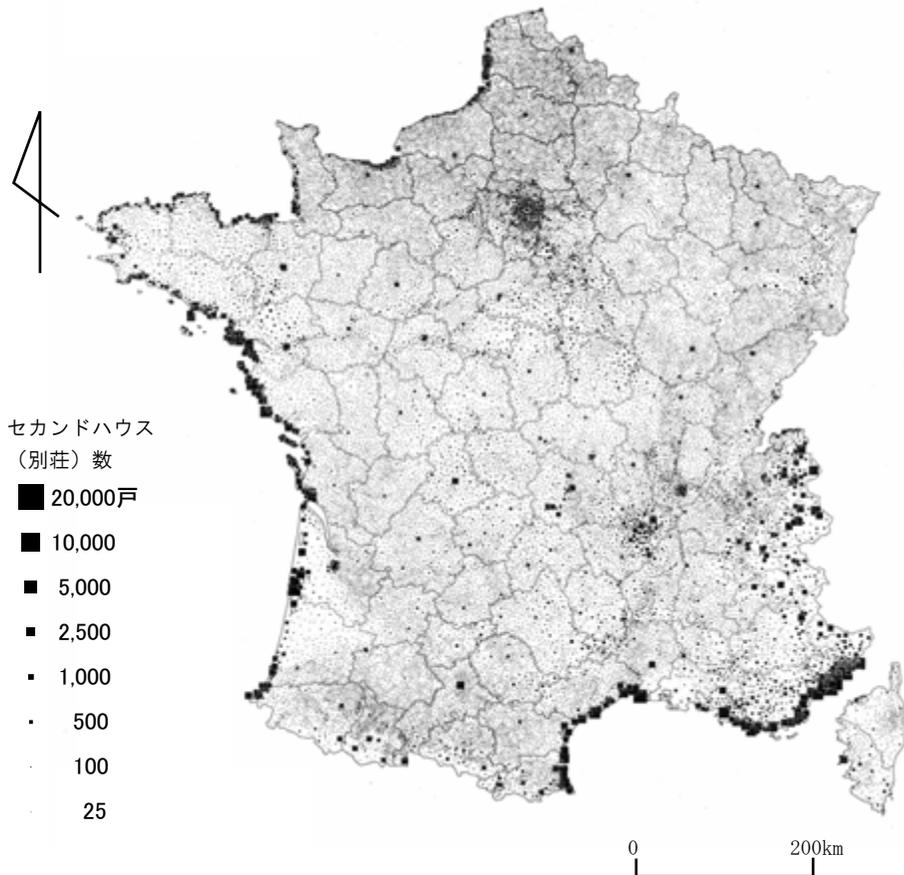


図1 フランスにおけるセカンドハウスの分布（1980年）
（Comite National de Geographie, Commission de Geographie Rurale（1984）による）

た (Hoggart et. al., 1995)。その結果、農村から都市へ人口の流出が進み、農村人口の高齢化や過疎化が顕在化するようになった。これによって農村に空き家が増加するのみならず、農業労働力の減少によって耕作放棄地も拡大した。耕作地放棄地では土壌浸食が起きやすく、農村における土地の劣悪化や生態的環境の悪化が引き起こされた。また、農村で受け継がれてきた生活文化（食文化や芸能・祭り、民俗、風習など）の伝統も人口流出による担い手不足によって衰退し、農村の社会的環境や文化的環境も崩壊の危機に瀕するようになった (Hoggart et. al., 1995；池永, 1999)。

過疎化・高齢化する農村を振興し、農村の自然的資源や文化的資源を保全するために、ルーラルツーリズムを推進する政策がヨーロッパの条件不利地域を中心に実施された。この政策の典型はEUの共通農業政策 (CAP) の1つであるデカップリング政策で、農業生産に対してではなく、農村の環境や文化の保全・整備に補助金を支給するものであった (Baldock and Beaufoy, 1993)。具体的には、農家を民宿に改築する費用や農村景観を保つために耕作を継続する費用、あるいはルーラルツーリズムのためにインフラストラクチャーを整備する費用などが補助され、それが農村や農業生産を維持することにも大きく貢献した (Hanningan, 1994; 小原, 2005)。かくして、農村を取り巻く諸環境や景観を保全するために農業が継続され、農村が維持されてきたといえる (Williams and Shaw, 1991；Pompl and Lavery, 1993；呉羽, 2001)。一方、ドイツで行われている「我が村を美しく」コンテストや「農村で休暇を」運動も、ルーラルツーリズムを核にして農村を振興しようとする政策の一つであった。実際、「我が村を美しく」コンテストを契機にして、農村の環境や観光施設が整備されるとともに、都市住民もコンテストの評価を意識しながら農村をツーリ

ズムの対象として訪れるようになった (山崎ほか, 1993；横山, 2006；富川, 2007)。

2. 日本におけるルーラルツーリズムの背景

日本の伝統的な農村では、稲作と養蚕を主体に多様な農業生産部門を少しずつ組み合わせた自給的な小農複合経営が発達し、それは「米と繭の経済構造」として周知されていた (山田, 1942；山本ほか, 1984)。しかし、市場経済の発達とともに、商品生産が農村で拡大するにつれて、自給的な小農複合経営は大きく変化するようになった (山本ほか, 1987)。そのような変化の1つは、収益性の高い農業生産を選択し、それを専門的に拡大させるものであった (山本・斉藤, 1986)。この選択的拡大部門として、野菜生産や果樹栽培、あるいは畜産が多く農村で選ばれ、それぞれの地域の条件に基づいて拡大していった (菊地, 1993)。

一方、選択的拡大部門による経済発展が困難な地域では、工場誘致や観光開発などに農地・山林を提供することで、あるいは都市の雇用市場に労働力を提供することで、現金収入を得るようになった (岡橋, 1997)。このような農村の土地や労働力の商品化は農村の存立基盤に関わる問題となり、それらの資源を失うことは農村的性格や農村景観、あるいは農村らしさを失うことにもつながった。特に高度経済成長期以降、都市と農村の経済格差が目立つようになると、青壮年層がより多くの現金収入を得るために、農村から都市へ流出するようになった (篠原, 1991)。このような人口流出は都市から離れた丘陵地域や山間地域の典型的な現象となり、そのような中山間地域における過疎化や高齢化は深刻な社会問題に発展した (小田切, 1995)。中山間地域問題を解決するため、山村振興法や過疎法が施行されたが、中山間地域における過疎化や高齢化、あるいは都市と農村の所得格差の拡大の傾向をくい止めることがで

きなかった（西野，1998；篠原，2000）。かくして、青壮年層の労働人口は都市で就業するために農村から流出し、高齢者農業の割合を高めることになった（藤田ほか，1994；菊地ほか，1995；菊地，2008）。

関東地方における農村の高齢化を把握するため、高齢者農業（60歳以上の高齢者が農業に専従する農家）の割合の分布を市町村別に示した。1980年の関東地方において（図2のa）、高齢者農業は東京都西部や埼玉県西部の山間地域、あるいは茨城県南部や千葉県中部の丘陵地域などを中心に分布していたが、その分布は都心に比較的アクセスしやすい交通条件の良い地域に限られていた。このことは、高齢者農業に象徴される農村性の脆弱化が都市との直接的な関連や都市化の影響で生じていることを示唆していた。2000年になると、高齢者農業の分布は中山間地を中心に、関東地方の西部地域に拡大するようになった（図2のb）。これは、米を主要な商品生産としていた東部地域の低地と異なり、丘陵や山麓斜面の桑栽培を土地利用の基盤にし、繭を主要な商品生産としていたことと関連していた。これらの地域では、養蚕の衰退後、繭に代わる有力な商品生産や現金収入源を見いだすことが難しく、農村の労働力が現金収入を獲得する主な手段となった。

中山間地域問題に関しては、都市との経済格差や地方における労働市場の狭小性、および農村からの人口流出と過疎化・高齢化などが取りあげられている（岡橋，2000）。また、農山村における農業労働力の低下が作付放棄地の拡大につながり、それが土壌侵食の増大や土地の劣悪化をもたらしている。近年では、このような環境問題も中山間地域問題の1つとして懸念されている。日本では、1980年代以降、さまざまな施策や方法が中山間地域問題を解決するため実施されてきた。その代表が、1987年に施行された「過疎地域活

性化特別措置法・総合保養地域整備法（リゾート法）」に基づくものであった（篠原，2000）。この法律に基づいて、高齢者福祉事業や旅館業の施設整備に税制上の特別措置が図られるようになり、ゴルフ場やスキー場、あるいはリゾート施設が外部の資本やノウハウによって建設された。外部の資本やノウハウに基づく外発的な観光化は、過疎地域を短期間で魅力的な地域に変化させたが、雇用や税収、あるいは人口維持や環境保全などの面で期待した効果をもたらさなかった（西野，1998；篠原，2000）。また、経済状況の変化により、外部資本が投入されなくなると、観光施設の維持は難しいものとなった。したがって、多くの場合、外発的な観光化は中山間地域に長期的・持続的な経済効果をもたらすことはなかった（佐藤，1990）。

外発的な観光化に対して、1990年代以降、内発的な観光化が中山間地域問題の解決策の1つとして考えられるようになった（石原ほか，2000）。内発的な観光化は外部資本に依存することなく、地元の資本やノウハウに基づくものであった（大橋，2002；山崎，2004）。中山間地域では、ルーラルツーリズム（グリーンツーリズム）が内発的な観光や地域振興の切り札として注目されるようになり（溝尾，1994）、それは人々の自然環境や生態系への関心の高まりと呼応していた（脇田・石原，1997）。実際、ルーラルツーリズムは都市－農村の交流事業を基盤にして展開するようになり（関戸，1994；21ふるさと京都塾，1998；持田，2002）、その事業は2005年までに農業振興地域の3,084市町村の約80%で、および山村振興地域の1,197市町村の約50%で実施された。

以上に述べたように、日本におけるルーラルツーリズムの存在形態や役割は自然環境や社会・経済環境、および政治・政策環境に対応して変化してきた（井上ほか，1996）。すなわち、ルーラ

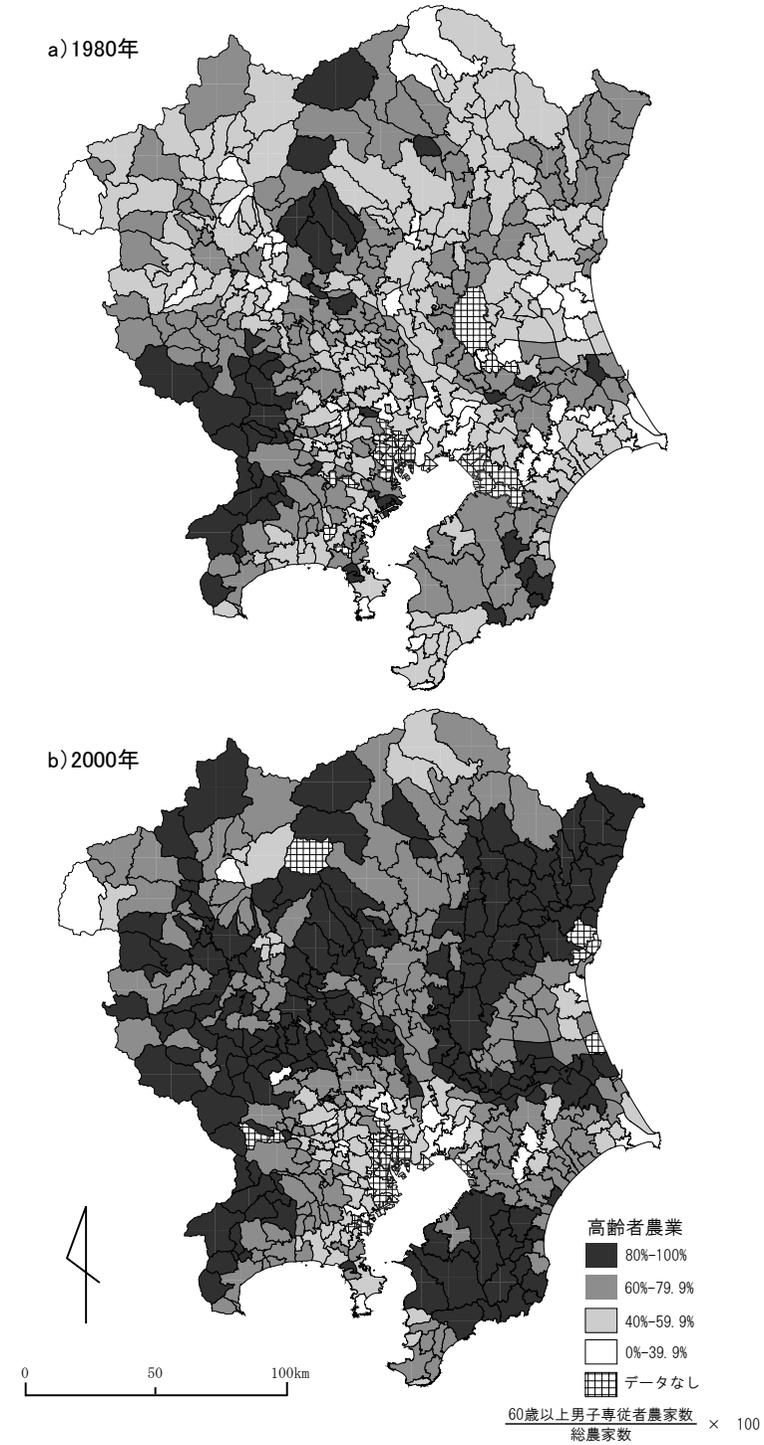


図2 関東地方における高齢者農業の市町村別の割合（1980年，2000年）
（農業センサスにより作成）

ルーツリズムが農家経済や農村経済を補完するものとして機能する時代から、農村の環境や資源を保全する時代へ、そして農村のリストラクチャリングに関わる時代へと変化してきた。このような変化は1990年代を境にして起こり、農村や農業を取り巻く生産主義からポスト生産主義への変化としても捉えられてきた(高橋, 1999)。1990年代以降、環境やエコロジーに配慮した持続的な経済活動が模索されるようになると、ポスト生産主義の考え方が農業や農村の在り方に影響を及ぼすようになった(高橋, 1997)。生産主義では、農業は食料を生産する経済活動として位置づけられ、その利潤最大化が至上命令として義務づけられてきた。それに対してポスト生産主義では、農業は生産活動としての機能をもつが、それ以外にも生態環境、投機的な土地空間、余暇空間、防災空間、アメニティー空間を提供するなど多様な機能をもつものと位置づけられるようになった(鷹取, 2000)。生産主義における農業は専門化・高度化・大規模化を目指して、特定の農村に集約化し点的な分布が促された。それに対して、ポスト生産主義の農業は多様性や面的な発展を評価するようになり、農村も多様な性格をもつようになった。そのような農村の多様な性格や機能を利用して、ルーツリズムが発展するようになった。

Ⅲ 農村地理学の研究課題としてのルーツリズム

1. 従来の農村地理学のフレームワークとルーツリズム研究

地理学における従来の農村研究は系統地理学的な視点に立つ研究と、地域地理学的な視点に立つ研究とに大別できる。前者の研究は集落地理学や社会地理学からのアプローチであり(浜谷, 1969)、その成果は農村の立地論(矢嶋, 1960)、および農村の形態論や構造論(橋本, 1969)にま

とめられる。これらの研究における農村は「ムラ(むら)」として位置づけられ、農林業に依存した住民による基礎的なコミュニティと、それがつくる領域(生活空間)に基づいていた。このような農村を説明するモデルとして、「基礎地域論」が知られており(水津, 1964)、家を単位とするコミュニティの内部構造と生活や経済活動の領域との関係から農村を類型化し、それらの地域的差異から日本における農村の空間構造を議論した。他方、後者の研究は農山村のモノグラフを蓄積し、その成果は農村空間区分にまとめられた(山本ほか, 1987)。地域地理学の研究は主に農村を農業地域の中心として捉え、農業的土地利用や営農形態を詳細に記述することにより(山本ほか, 1984; 山本, 1991)、それぞれの地域の性格を明らかにした。そして、農村空間が区分され、その空間構造がチュウウネン圏モデルと関連づけて議論された(山本・斉藤, 1986; 藤田ほか, 1994)。地理学におけるルーツリズムの研究も特定の農村のモノグラフとしてはじまり(呉羽, 1991; 関戸, 1994)、それらの多くはルーツリズムの実態を報告する域を脱することはなかった。以上に述べた一連の農村研究はいずれも静的で生産主義の視点に立った分析であり、農村の動的な変化に対応した研究のフレームワークを提示していたとはいえなかった。

第2次世界大戦後、先進国の農村は経済成長や工業化社会の成熟にともなって著しく変化した(山本, 1991; Bowler, 1992)。このような農村の変化を説明する理論的なフレームワークとして、周辺地域論や縁辺地域論が生産主義の視点に基づいて経済成長とともに台頭してきた(岡橋, 1997)。これらの理論は経済学の労働市場論や社会学の近代化論を基盤としており、さまざまな意味で農村を支配する都市と、都市に食料や労働力を供給する農村を、中心と周辺の関係で捉えてい

る。つまり、中心と周辺は食料や労働力の需給関係で結びつけられ、その関係を強化するために、都市は農業政策や補助金で農村の在り方を常に規定してきた (Green and Myer, 1997; Sorensen, 1993)。しかし、食料がグローバル化によって海外に求められ、国内の農村における食料供給機能が低下するようになると、新たな都市-農村関係が求められるようになった (McMunus, 2001; Welsh et. al., 2003)。このような状況のなかで、1980年代後半以降に新たなフレームワークを構築してきたのが周辺地域論である。このなかで、都市からの要求 (観光地化, 宅地化) に対する農村の対応とその明暗が (Walmsley, 2003), そして都市-農村の共生を図るフレームワークが具体的に議論されてきた (Hinrichs, 2000; Brown, 2002)。したがって、地理学におけるルーラルツーリズムの議論は、都市-農村の新しい関係や交流、あるいは共生や共存の関係で捉えられるようになった。

農村地域の変化を説明する理論として、ポリティカルエコロジー論やアクターネットワーク理論が1980年代以降、農村研究の方法に新たに加わるようになった。ポリティカルエコロジー論は政治経済学のフレームワークとして登場し、政治経済構造と生態学的プロセスとの相互関係を明らかにするものであった。Blaikie (1985) や Bassett (1988) は、小農社会や農村が国の政策や経済状況に影響を受けて変化し、生業形態や土地利用も変化することで、環境破壊がもたらされることを明らかにしている。つまり、ポリティカルエコロジー論のフレームワークは農業生産だけでなく、それを含めた農村社会全体を視野に入れており、発展途上国の農村変容が個人や地域、および国の政治経済的な意思決定の脈絡で議論されている (島田, 1999)。特に、ルーラルツーリズムの導入にともなう農村変容をポリティカルエ

コロジー論で読み解く切り口は、①農家や農村や地域などのレベルにおける人間活動と環境との相互関係、②経済のグローバル化と新たな資源利用にともなう伝統的な資源利用の変容、③資源利用や土地利用に対する国家や企業の干渉とその影響、④生産や市場経済に関する社会組織の変容とそれにとともなう農家や農村の意思決定、⑤農村や地域の特殊性の5つであった (Bassett, 1988)。このようなポリティカルエコロジーのフレームワークも生産主義の視点に基づくものであり、その根底には経済的利潤の追求や経済組織の効率化があった。

他方、アクターネットワーク理論は地域変動を引き起こす主体とそのネットワークからの分析であり (Sorensen and Epps, 1996)、消費者、生産者、政策、農村環境、農産物などがアクターとなり、アクターネットワークやアクター空間を形成するとした。アクターネットワーク理論の真髄は物質・現象・社会などの構成要素の複雑な連携とその調整過程を議論できることにある (堤, 1995; 北崎, 2002)。つまり、農村空間には多様なアクターによって形成された社会空間が重なって存在し、これらの社会空間は農村変化にそれぞれの考え方や利害、あるいは状況に基づいて対応し、それぞれのアクターネットワークに基づく空間を形成する (Bryant, 1995)。このようなアクターネットワーク空間は、アクターやネットワーク相互の調整や妥協、あるいは政治プロセスによって、農村変化に適応した新たな空間を構築する (Murdoch and Marsden, 1995; Roberts, 1995)。アクターネットワーク理論を用いたルーラルツーリズムの議論で強調されたのは、経済活動のネットワーク構築とその面的な広がりであり、そこでは農村社会の存在とそのコミュニティが重視されていた。このような議論の多くは未消化のままであったが、ポスト生産主義の議論につながる視点を示していた。

2. ポスト生産主義の視点とルーラルツーリズム研究

ポスト生産主義の視点は、1990年代以降にイギリスの地理学者によって用いられてきた研究のフレームワークであった。Ilbery (1998) はポスト生産主義の特徴として、①農業生産が減少したこと、食料に対する関心が量より質に転換したこと、②農業に対する政府補助金が減少する一方で、農場収入に対するデカップリング政策が行われたこと、③食料生産の競争が激化するとともに、食料の国際市場が拡大したこと、④環境保全プログラムの展開によって、農業に対する環境規制が増加したこと、⑤持続的な農場システムの構築がより図られるようになったことの5つをあげている。食料生産の規模拡大と専門化、および単位面積あたりの収穫量の増大を目的とした生産主義的な農業は、先進諸国における食料の充足と品質への関心の高まり、さらには各国経済に占める農業比率の低下にともなって、ポスト生産主義に移行し、農業に対する関心は持続性 *sustainability* や農家の多就業化 *pluriactivity* に移ってきた (Ilbery, 1998; Argent, 2002; Wilson and Rigg, 2003)。かくして、1990年代後半には、ポスト生産主義の視点は農村地理学の主要な分析フレームワークの1つとなった。日本においても、高橋 (1998, 1999) と Takahashi (2001) が、1961年の農業基本法と1999年の食料・農業・農村基本法の比較分析を通じて、農業や農村の多面的機能が強調されてきたことを明らかにし、ポスト生産主義の傾向を識別した。

ポスト生産主義の視点が登場してきた背景として、1990年に始まる農村地理学研究の批判的なアプローチがあった。その議論の嚆矢とされる Mormont (1990) は、農村地域における社会-空間関係の性格とその変化を多面的に捉え、①人・モノ・情報の流動性の高まりにともなう、農村コ

ミュニティの自律性の低下、②経済活動の広域化にともなう地域の均質化、③農村地域における観光利用や開発の広域化と新たな地域ネットワークの構築、④農村における混住化と多様化、および⑤農村空間の多機能化を明らかにした。このことは、農村空間が単純でないことを示唆し、農村では同じ地理的範囲に多様な社会空間が重なっているという考え方の理論的な根拠となった。これら一連の研究は農村の多機能化や社会の多様化に対応するものであり、ルーラルツーリズムも農村における1つの機能として、あるいは1つの社会空間を構築するものとして議論されるようになった (Cloke et. al., 2006)。

農村における多様な社会空間では、利用者や利用主体の考え方や利害に基づいてアクターネットワークが構築されるため、それらの多様性や多機能性はポスト生産主義のアプローチの対象になった (Bryant, 1996, 1998)。このようなアクターネットワークの空間的な広がりによって、あるいは農村における社会空間の水平的・垂直的なネットワークによって農村の再編が議論されるようになった (Marsden, 1996)。例えば、消費者の食品の安全性に対する関心の高まりによる有機農産物の産地形成プロセスにおいて、生産者・消費者・政策による地域的な水平的ネットワークは、グローバルな農産物流通ネットワークとの関連で垂直的に結びつき、産地形成を強化する方向で再編された (Ilbery and Kneafsey, 1999; Essex et. al., 2005)。同様に、ルーラルツーリズムの発展にともなう地域変容の議論においても、地元社会とホスト (農家)、およびゲスト (利用者) と行政のそれぞれの水平的なネットワークが、農村の再編を強化する方向で垂直的に結びつき、そのことが螺旋的にルーラルツーリズムの発展につながることも明らかにされた。しかし、アクターネットワークの議論はネットワークの構成要素とそれ

らの結合パターンを強調するため、ポスト生産主義の視点に基づく農村再編の実態を示すことは難しく、ルーラルツーリズムの議論に適応されることも少なかった。

他方、ルーラルツーリズムに関連した議論として、Halfacree (1997) はポスト生産主義の視点で都市から農村への移動と移住を捉えた。このような現象の発生は非農業的アクターや都市住民によるルーラリティ rurality (農村らしさ、農村性) に対する関心や興味によるもので、いわゆるカウンター・アーバナイゼーション (反都市化) と関連したものであった。このような現象に基づいて、ポスト生産主義の視点では「農村空間の商品化」や「ルーラル・ジェントリフィケーション (農村の美化・高級化)」という概念が農村再編の議論に用いられるようになった。つまり、余暇空間やレクリエーション地域として注目された農村においては (Layton, 1981; Kikuchi et. al., 2007), 農業や農村の多機能性が強調され、自然・歴史・生活文化・農産物・農産加工品が1つの「パッケージ化された」商品として消費されるようになった (Cloke, 1992; Hinrichs, 2000; Brown, 2002)。このようなルーラリティの商品化はルーラルツーリズムが農村再編の核となり、農村景観の美化とともに農村のライフスタイルやコミュニティを積極的に変化させた (Cloke, 1996; Ilbery, 1998; 脇田・石原, 1997; 菊地, 2002; Kikuchi et. al., 2002; Kikuchi, 2007)。

農村の商品化と再編に関連して、農村の場所性や多機能性を評価し、新たな「農村空間」の存在を理解する必要がでてきた。農村の商品化や再編の前提には、農村としての場所性の議論が不可欠である。つまり、さまざまな性格や機能をもつそれぞれの空間が1つの地理的領域に重なり合って展開し、その重なり具合が場所を性格づけることになる。その前提を踏まえると、農村再編は経済・

生産空間から社会・文化空間としての農村の演出、自然環境の保全と農業環境の維持の両立 (農村維持が環境保全に繋がること)、プロダクティブエイジング (農村の高齢化と生きがい農業、田園居住) の創成、農山村の工業化、および農山村における余暇とツーリズムの発展などからアプローチされてきた (Rolley and Humpherys, 1993)。結果的には、農村の場所性やその社会的表象性 (ルーラリティや牧歌的情景) を農村再編に利用することが重要とされ (Greive and Tonts, 1996)、農村の多面性の理解 (農業生産の場としてだけ理解するのではなく) や農村という特定の場所に対するこだわり、あるいは保護されるべき農村環境 (デカップリング政策などによる) や場所の商品化 (ルーラルツーリズム) が議論されてきた。

このような議論のなかで、ルーラルツーリズムは農村の商品化や場所性を検討する鍵となり、農村再編の中心的なテーマとして捉えられてきた。特に場所性の議論は、ポスト生産主義のフレームワークで農村変化の多様性を検討するものである。それは、農村変化に関わる諸因子を総合的に評価検討しながら統合するものであり、従来の農村地理学研究のように、社会経済に関わる因子だけを強調するものではなかった。ポスト生産主義の視点に基づく場所性の議論は、場所に関わるさまざまな固有の因子を重視し (Murdoch and Pratt, 1993)、農村の存在形態や存在意義を生態 (自然) 環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境と関連づけて評価するものであった。このことは、フォーディズム農業への批判にもつながり、農村が食料生産の場としてだけで、あるいは食料供給基地としてだけで存続することの難しさを明らかにした (Cloke and Goodwin, 1992)。しかし、農村の場所性に関する議論 (ロカリティ理論) は抽象的な説明にとどまり、実証的な検証は十分に行われなかった。そのため、場

所性のフレームワークをルーラルツーリズム研究に適応するためには、農村の場所性を構築する諸因子がどのように協調し合い結合するのか、そして諸因子の有機的結合が外部の影響を受けてどのように再編されるのかが解明されなければならない (Halfacree, 1993; Kikuchi et. al., 2002; Milbourne, 2003; Paquette and Domon, 2003)。

3. 持続的農村システムとルーラルツーリズム研究

20世紀後半、農業の専門化や規模拡大が進み、少品目大量生産のシステムが構築された。しかし、多くの農村は少品目大量生産のシステムを構築できず、主な収入源を農業から収益性の高い都市的産業に転換するようになった。ここで問題となってきたのが、農地に対する環境負荷と農村コミュニティの崩壊であった。農地の生態環境や農村コミュニティの生活文化を損なうことなく、農業を永続的に維持するシステムが必要になり、持続的農村システムが考えられるようになった (Brklacich et. al., 1990; Robinson, 2003)。この理論的なフレームワークは、当初、農地の生態環境の維持と保全のために考え出されたが、1990年代以降には農地-コミュニティ-経済活動-生活文化の有機的な結合から農村全体の持続性が考えられるようになった (祖田ほか, 1996; Drummond and Marsden, 1999; 田林・菊地, 2000)。また最近の研究では、持続的農村システムを内向きの閉じたものとし捉えるのではなく、外部社会との関わりを積極的に進め、農村を含めた社会全体の持続性を社会的持続性として考えるようになった (Bowler et. al., 2002; Hall et. al., 2004)。このことは、都市と農村が混在する現代的な様相を反映してのことであった (高橋, 1997)。

農村の持続的システムを考えるうえで、「農業を行う場所」や「農民の生活空間」としての地域

社会の持続性は重要な意味をもっている。農村の持続的発展のためには農村住民が相互のコミュニケーションをもち、生活のなかで社会的・文化的な欲求を充足することが重要である (祖田ほか, 1996)。日本では旧来の村落共同体が高度経済成長とともに崩壊し、人間的な結びつきが希薄になった。この人間的なつながりに基づくコミュニティ活動の弱体化は環境問題よりも深刻になっている (田林・菊地, 2000)。持続的な農村の構築には、農村の構成員の資質とそれらがつくる組織と指導者、さらに後継者の教育、農村の社会的・経済的・文化的基盤の充実が重要であった (Everitt and Aniss, 1992; 田林・菊地, 2000)。また、農村の持続的な発展は①産業としての経済的発展と、②環境を保全しながら生産活動を持続する生態的発展、および③個々の居住者と構成世帯が組織をどのように作り、いかにコミュニケーションを保ちながら、社会的・文化的活動を継続するコミュニティを発展させることによってもたらされる (田林・菊地, 2000)。このような持続的な農村システムの構築はルーラルツーリズムの導入・発展を契機にしている場合が多く、ルーラルツーリズムによりコミュニティなどの社会組織が再編され、次いで経済基盤がツーリズムにより再生され、それに付随して農村の生態環境も保全されるようになる (Roberts and Hall, 2001)。このことは、ルーラルツーリズムが農村の持続的システムの契機となるだけでなく、システムを構築するドライビングフォースになることを示唆している。

持続的な農村システムで議論されたコミュニティや社会組織の再編をより体系化したものが、ソーシャル・キャピタルのフレームワークである。ソーシャル・キャピタルとは、人々の協調的・親和的な行動が活性化するにつれて社会の効率性が高まるという考え方で、社会の信頼関係や互酬

性の社会規範，社会的ネットワークに基づく社会組織の重要性を説明した概念である。Hanifan (1916) がソーシャル・キャピタルのフレームワークを用いた最初の研究として知られ，そこではアメリカ合衆国ウェストバージニア州の農村地域における学校教育の在り方が議論された。つまり，Hanifan はソーシャル・キャピタルが地域社会における社会的交流と相互の共感，仲間意識，善意などの総体として構築され，それが発展することで農村における学校教育が定着すると結論づけた。Hanifan の研究をさらに発展させ，ソーシャル・キャピタルを地域や社会の発展と結びつけるフレームワークを提示したのが Putnam の一連の研究であった（東，2003；宮川，2003）。Putnam (2000) はソーシャル・キャピタルを「人々の協調行動を促すことにより，その社会の効率を高める働きをする社会制度」と定義し，「信頼」と「規範」，および「社会的ネットワーク」を構成要素としているとした。一般的には，ソーシャル・キャピタルが高まることで，地域の経済活動や社会活動が効率よく発展することが実証されてきた（Kikuchi et. al., 2007）。

以上に述べたソーシャル・キャピタルの考え方から農村社会の発展の諸相を研究したものとして，Woodhouse (2006) があげられる。この研究はオーストラリアにおける農村社会の発展と衰退の様相を議論し，都市化や企業的農業の発展によってソーシャル・キャピタルが低下し，家族農場を主体とする農村社会が衰退することを明らかにした。このような農村社会の衰退は農村らしさ（ルーラリティ）の喪失を意味し，農村の居住者や訪問者の減少を引き起こした。反対に，ソーシャル・キャピタルの高度化によって農村景観の維持や農村の美化，あるいはルーラリティの保全を低コストで円滑に進めることができ，農村の居住者や訪問者の増加をもたらしてきた（Jones,

2005）。例えば，ドイツにおけるルーラルツーリズム発展の契機となった「我が村を美しく」運動は，ソーシャル・キャピタルの高度化によって成功へと導かれ，ルーラルツーリズムのドライビングフォースとして機能することになった（呉羽，2001；小原，2005）。また，カナダ・ヴァンクーバー島における農村環境の保全と適正利用に関する研究においても（Dearden and Rollins, 2002），地域コミュニティのまとまりと関与が自然環境や景観の維持と農村の美化に大きな影響を与えるとともに，農村の環境や資源の適正利用と持続性を決定づけてきたことを明らかにした。これら一連の研究はソーシャル・キャピタルのフレームワークを用いたルーラルツーリズムの研究の可能性を示唆していたが，そのフレームワークは農村地域や農村社会の内向きの議論であり，外部社会との関わり合いが強調されるルーラルツーリズムの議論に適応しているかは今後の検討課題の1つである。

外部社会との関わりを強調して農村コミュニティ変容や存在形態を議論するフレームワークとしてアリーナ社会理論があり，それを用いた農村研究は1990年代になって見られるようになった。アリーナ社会理論では（Fuller, 1994, 1997），伝統的農村が工業化社会を経てアリーナ社会を形成することを提示している。伝統的農村は政治的・社会的・文化的・経済的組織が農村の領域のみで重合し，自己完結型の閉鎖的な農村空間を構築してきた。しかし，工業化社会になると，農村の諸組織が都市化によって他地域に依存し，農村のアイデンティティは失われ，伝統的な農村空間は解体する。その後，ポスト工業化社会の台頭と呼応して，農村の性格やアイデンティティを再生するため，他地域に依存していた諸組織が広域的な結びつきを残しながら強化され，農村空間はアリーナ社会として再構築される（Dahams, 1998；

Kikuchi and Yabe, 2003)。つまり、アリーナ社会理論の眼目は農村空間がさまざまな広域的な空間に包摂されながら、その舞台としての農村空間の性格を持続させていくことにある。アリーナ社会理論は農村の閉鎖性の崩壊、農業の地域的分業と都市への依存、およびさまざまな社会空間の拡大と農村の再編を時系列的に議論し、広域的な空間との関わりにおいて、農村が多様な性格を強調し諸組織を強化することで再編される様相を明らかにした(図3)。このフレームワークを援用すると、ルーラルツーリズムの現象も外部社会との関わりを基盤としているため、ルーラルツーリズムの発展した農村をアリーナ社会理論のフレームワークで説明することはできる。しかし、アリーナ社会理論ではルーラルツーリズムの根底となる農村の場所性の議論が不足するため、ルーラルツーリズムの議論が皮相的なものとなり、どこにでもあるようなツーリズムの議論に陥る危険性もある。

Ⅳ ルーラルツーリズム研究の新たな展開と視点 —むすびにかえて—

21世紀以降、世界の先進国の農村を取り巻く環境が大きく変化するなかで、生産主義の視点に

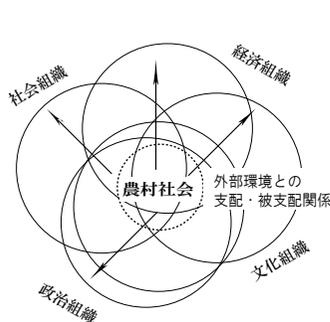
立って農村を活性化する試みよりも、ポスト生産主義の視点で農村を再編させようとする傾向がかなり強くなっている。地理学における農村研究もポスト生産主義の視点を前提として行われるようになり、農村の多機能性が農村再編と関連づけて注目されるようになった。そして、ルーラルツーリズムは農村の多様な機能や資源に基づく人間活動の1つであり、地域変化の鍵として農村再編において重視されるようになった(Woods, 2005)。このような役割を担うルーラルツーリズムの研究は、前章で農村研究と関連づけて概観したように、大きく3つに分類することができる。すなわち、①ツーリズムの実態に関する静態分析と②ツーリズムがもたらした地域変化の動態分析、および③ツーリズムによる農村環境の保全と適正利用の持続システム分析の3つである。

ツーリズムの実態を静態的に分析した研究は、地域形成の分析と同様にツーリズムの集積地域の形成要因や資源利用のパターンを主に議論し、各地におけるルーラルツーリズムのモノグラフの蓄積に貢献した。しかし、ルーラルツーリズムの静態的な研究の多くは、ツーリズムを利潤追求の経済活動として捉え、即効的な地域活性化や地域振

a) 伝統的農村社会



b) 工業化社会



c) アリーナ社会

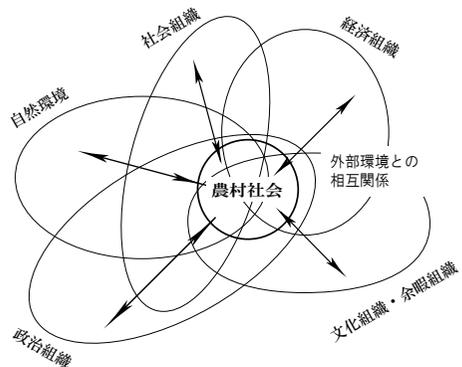


図3 群馬県大泉町を事例にしたアリーナ社会の形成モデル
(Fuller (1994) のモデルを修正)

興の担い手として位置づけてきた。このような生産主義の視点に基づく研究のアプローチは、ポスト生産主義の視点が重視されるようになると、ツーリズムのもとで地域変化の動態分析へと変化した。ツーリズムの動態分析では、農村の多機能性に配慮し、どのような機能や資源をいかに組み合わせることでツーリズムを確立し発展させてきたかが議論されるようになり、機能や資源の体系的な組み合わせの基盤となるルーラリティやロカリティが強調されるようになった。ツーリズムの動態分析において課題になったのは、農村地域が環境の保全と適正利用に基づいてツーリズムを持続的に発展させることができるかであった。かくして、ルーラルツーリズムの研究は、持続的農村システムの研究と呼応しながら、ツーリズムの持続的な効果を可能にするコミュニティや地域社会の議論を深めてきた。一連の研究では、プロダクティブエイジングの利用やソーシャル・キャピタルの高度化、あるいはアリーナ社会の形成がルーラルツーリズムの導入と発展の契機となり、ツーリズムが持続的農村システムの構築だけにとどま

らず、社会的持続性の確立に貢献していることを明らかにした。

以上に述べたように、ルーラルツーリズムの研究は静態分析から動態分析に、そしてシステム分析へと発展してきた。しかし、持続システムの研究は農村や農業を支えるメカニズムを、あるいはツーリズムを支えるメカニズムを地域要因の結びつき（システム）で説明することはあっても、農村の諸環境や地域資源の多様性を統合して議論するフレームワークを合理的に構築することはなかった。例えば、近郊酪農地域における持続的農村システムの研究で議論されたように、酪農を支えるルーラリティは農地、乳牛飼養と牛乳生産、農村コミュニティの地域要因を相互に関連させ結びつけることで構築され、そのシステムがツーリズムの発展にも適応し貢献した（Kikuchi et. al., 2007）。この議論は近郊酪農を支える地域要因の結びつきに基づいてツーリズムの発展を説明しているにすぎず、農村の自然環境や社会・経済環境や歴史・文化環境などを、あるいは酪農以外のさまざまな地域資源を統合することで地域の持続シ

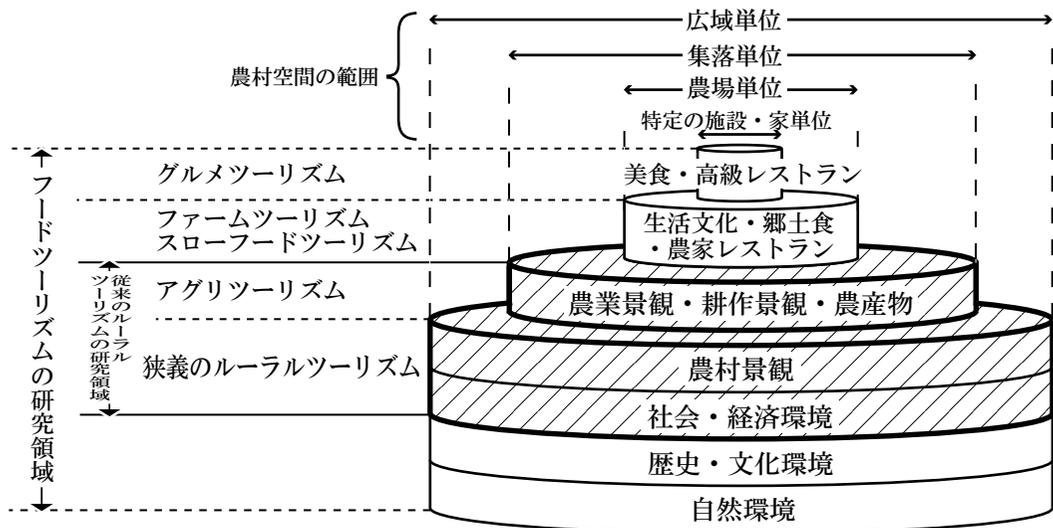


図4 フードツーリズムのフレームワークとその重層的な構造

ステムやツーリズムの持続的発展を検討することが課題として残された。そこで、本研究は農村の多様性や多機能性を重視してルーラルツーリズムをより総合的に議論する1つの方法として、フードツーリズムのフレームワークの援用を提案する。

フードツーリズムに関する Hall et. al. (2003) の議論では、農村におけるツーリズムはいくつかの空間的な段階を含んでおり、その重層的な構造がフードツーリズムのフレームワークの基盤になっている(図4)。最も基本的で原初的な段階は、①農村の自然景観や文化景観を対象とするツーリズムであり、それは一般にルーラルツーリズムとして周知されてきた。このツーリズムは農村の自然景観と文化景観を基盤にしているため、どこの農村でも環境や景観の保全とそれらの適正利用を図れば容易に成立・発展させることができる。ここで提供されるアトラクションはいわゆるルーラリティであり、その空間的な範囲は広く、農村の領域を超えることも多い。また、このツーリズムのアトラクションを享受する観光者も多く、ルーラリティの持続性が観光者の維持に直接関わっている。

農村景観を基盤にしたツーリズムの次の段階は、②農村における農業生産や食の生産景観を対象とし、農産物やその加工品の直売を重要な要素とするツーリズムであり、それらはアグリツーリズムと呼ばれるものである。このツーリズムは農村における生産活動とその生産物を基盤とするため、環境や景観の保全を目的に農業を持続させたり、都市住民の余暇として農業体験を企画したり、あるいは多品目少量生産で旬の農産物を生産したりすることで成立・発展してきた。ここで提供されるアトラクションは農村における日常的なものであり、その空間的な範囲は農業生産の領域に限定され、農村景観を基盤にしたツーリズムより狭

くなる。また、このツーリズムを享受する観光者も農村景観のそれよりも少なくなるが、地域経済に与える影響は農村景観のそれよりも大きなものとなる。従来の研究では、ルーラルツーリズムは①と②のツーリズムを統合することで狭義に捉えられたが、それらの空間的な重層性や相互関連性の議論は不十分であった。

従来のルーラルツーリズムは、③農村や地域に根づいた伝統的な食文化(生活文化)のツーリズム(スローフードツーリズムやスローライフツーリズム)が加わることによって、さらなる進化を遂げることになる。新たに加わったツーリズムは農村の伝統や文化をアトラクションとするものであり、その空間的な範囲は日常生活の領域や家の領域となってさらに狭くなる。また、このツーリズムを享受する観光者もさらに少なくなるが、観光者1人1人の農村への理解は従来よりも深化していく。そして、農村における伝統食を中心に生活文化の商品化が進むことによって、④地元の食材や食文化を洗練させ、一流の料理人による新たな食文化のツーリズム(グルメツーリズム)が展開するようになる。最終的なツーリズムの空間的な範囲は特定の施設やレストランに限定され、その利用者も限られている。しかし、農村の商品化とブランド化が美食文化の空間によって決定づけられ、農村はツーリズムの空間として成熟していくことになる。

フードツーリズムの分析フレームワークを用いたルーラルツーリズム研究の典型的な事例として、オーストラリアやニュージーランドにおけるP.Y.O.農場(摘み取り農場)とワイナリーの研究がある。P.Y.O.農場は都市近郊農村に多く立地し、野菜や果物、ベリー類の収穫と購入を目的とする都市住民に利用されている。都市住民は新鮮で低廉で安全な農産物を求め、余暇活動として農場を訪れ、農業生産者は都市住民の需要と収穫

作業の省力化に応える形で P.Y.O. 農場を発達させた。これは、農村景観と農業体験、および農産物を組み合わせた原初的なフードツーリズムであり、その発展は近郊農村の持続性を確かなものにしてきた (Butler et. al., 1998; O'Toole et. al., 2003)。また、ワイナリーの研究では、ブドウ栽培地域の農場がワイナリーの経営を開始することにより、その就業がツーリズムに関連したブルーリアクティビティの一部門として機能するようになる (Hungerford, 1996)。ブドウ栽培地域では、農村景観とブドウの栽培景観、およびワイナリーとそれに付随した民宿やレストランの有機的な組み合わせがルーラルツーリズムを発展させる基盤となり、その組み合わせの多様性が農村の持続性に大きく貢献している (Davies et. al., 1998; Walmsley, 2003)。

全体的には、農村景観の空間、農業景観や農産物生産の空間、生活文化やスローフードの空間、および美食文化の空間が相互に関連しながら1つの地域に重なり合って展開することにより (図4)、フードツーリズムは成熟したものとなる。このような重層的な空間構造がフードツーリズムの基本的なフレームワークであり、それぞれの空間を結びつけるものが「食」であり、それに関連した因子や制度である。このように、ルーラルツーリズムの研究では、農村のさまざまな空間や組織をどのような繋ぎ手を利用して結びつけ、そのシステムを農村の再編や活性化にどのようにつなげていくのが重要な視点となる。その意味で、フードツーリズムのフレームワークはルーラルツーリズムの新たな視点を提供するものとなり、さまざまな農村研究はもちろんのこと、農村の再編や活性化の議論に貢献するものと考えられる。

文 献

- 東 一洋 (2003) : ソーシャル・キャピタルとは何か - その研究の変遷と今日的意義について - . *ESP : Economy, Society, Policy*, **456**, 25-30.
- 池永正人 (1999) : オーストリアアルプスにおける山岳観光の発展と山地農民の対応 - チロル地方フィス村を事例として. *人文地理*, **51**, 68-72.
- 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子 (2000) : 『新しい観光と地域社会』古今書院.
- 井上和衛・中村 攻・山崎光博 (1996) : 『日本型グリーンツーリズム』都市文化社.
- 大橋めぐみ (2002) : 『中山間地域におけるルーラルツーリズム, 日本の農業』農政調査委員会.
- 岡橋秀典 (1997) : 『周辺地域の存立構造』大明堂.
- 岡橋秀典 (2000) : 中山間地域研究と農村地理学 - 地域学的アプローチからの一考察. *広島大学文学部紀要*, **60**, 113-138.
- 小田切徳美 (1995) : 『日本農業の中山間地帯問題』農林統計協会.
- 小原規宏 (2005) : ドイツバイエルン州における農村再編とその持続性. *地学雑誌*, **114**, 579-598.
- 菊地俊夫 (1993) : 『日本の酪農地域』大明堂.
- 菊地俊夫 (2002) : シドニー都市圏の都市周辺農村における農業的土地利用変化とその持続的性格, ペンリス市キャスルレイ地区の事例 - . *地学雑誌*, **111**, 81-99.
- 菊地俊夫 (2008) : 『観光を学ぶ - 楽しむことからはじまる観光学』二宮書店.
- 菊地俊夫・横田雅博・田中隆志 (1995) : 三国山地南部の山村における生業システムの変容とその地域的性格 - 群馬県水上町藤原郷の場合 - . *えりあぐんま*, **2**, 1-30.
- 北崎幸之助 (2002) : 戦後開拓地の変容過程におけるアクターの果たした役割 - 茨城県南部大八洲開拓農業協同組合地区を例として - . *地理学評論*, **75A**, 161-182.
- 呉羽正昭 (1991) : 群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成. *地理学評論*, **64A**, 818-838.
- 呉羽正昭 (2001) : 東チロルにおける観光業と農業の共生システム. *地学雑誌*, **110**, 631-649.
- 佐藤 誠 (1990) : 『リゾート列島』岩波新書.
- 島田周平 (1989) : 70年代以降ナイジェリアの農村社会変容の一断面 - 労働力移動にみるエビヤ村の事例から - . *人文地理*, **41**, 321-318.
- 篠原重則 (1991) : 『過疎地域の変貌と山村の動向』大明堂.

- 篠原重則 (2000) : 『観光開発と山村振興の課題』 古今書院.
- 水津一郎 (1964) : 『社会地理学の基礎問題』 大明堂.
- 関戸明子 (1994) : 『都市との交流事業による地域活性化 - 群馬県川場村中野の事例. 群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), 43, 178-188.
- 祖田 修・大原興太郎・加古敏之編 (1996) : 『持続的農村の形成 - その理念と可能性』 富民協会.
- 多方一成・田淵幸親・成沢広幸 (2000) : 『グリーン・ツーリズムの潮流』 東海大学出版会.
- 鷹取泰子 (2000) : 『東京近郊における都市農業の多機能性システム - 東京都練馬区大泉地区を事例として - . 地学雑誌, 109, 401-417.
- 高橋 誠 (1997) : 『近郊農村の地域社会変動』 古今書院.
- 高橋 誠 (1998) : 『空間としての「農村」から農村空間の社会的表象 - 農村性の社会的構築に関するノート (1). 情報文化研究, 7, 97-117.
- 高橋 誠 (1999) : 『ポスト生産主義, 農村空間の商品化, 農村計画 - 農村性の社会的構築に関するノート (2). 情報文化研究, 9, 79-97.
- 田林 明・菊地俊夫 (2000) : 『持続的農村システムの地域的条件』 農林統計協会.
- 堤 研二 (1995) : 『産業近代化とエージェンター - 近代の八女地方における茶業を事例として. 経済地理学年報, 41, 171-191.
- 富川久美子 (2007) : 『ドイツの農村政策と農家民宿』 農林統計協会.
- 西野寿章 (1998) : 『山村地域開発論』 大明堂.
- 21 ふるさと京都塾 (1998) : 『人と地域をいかにグリーンツーリズム』 学芸出版社.
- 橋本征治 (1969) : 『散居村における社会構造の地理学的研究 - 砺波における事例 - . 人文地理, 21, 541-574.
- 浜谷正人 (1969) : 『農村社会の空間秩序とその意義. 人文地理, 21, 135-159.
- 藤田佳久・菊地俊夫・西野寿章 (1994) : 『人間環境と風土 - 農村風土の構造と変容』 大明堂.
- 溝尾良隆 (1994) : 『観光を読む - 地域振興への提言 -』 古今書院.
- 宮川公男 (2003) : 『ソーシャル・キャピタル論の背景と基礎. 麗澤経済研究, 11, 15-25.
- 持田紀治 (2002) : 『グリーン・ツーリズムとむらまち交流の新展開』 家の光協会.
- 矢嶋仁吉 (1960) : 『集落地理学』 古今書院.
- 山崎光博 (2004) : 『グリーン・ツーリズムの現状と課題』 筑波書房.
- 山崎充博・小山善彦・大島順子 (1993) : 『グリーン・ツーリズム』 家の光協会.
- 山田勝次郎 (1942) : 『米と繭の経済構造』 岩波書店.
- 山本正三編 (1991) : 『首都圏の空間構造』 二宮書店.
- 山本正三・石井英也・山下清海・村山祐司・菊地俊夫 (1984) : 『阿武隈高原南部における小農複合経営の展開 - 福島県東白川郡鮫川村の場合 - . 人文地理学研究, Ⅷ, 59-120.
- 山本正三・齊藤 功 (1986) : 『地域区分と土地利用 - 関東地方における農業的土地利用の地帯構造. 大明堂編集部編: 『新日本地誌ゼミナールⅢ 関東地方, 大明堂, 188-200.
- 山本正三・北林吉弘・田林 明 (1987) : 『日本の農村空間 - 変貌する日本農村の地域構造 -』 古今書院.
- 横山秀司 (2006) : 『観光のための環境景観学 - 真のグリーン・ツーリズムにむけて -』 古今書院.
- 脇田武光・石原照敏 (1997) : 『観光開発と地域振興 - グリーン・ツーリズム解説と事例 -』 古今書院.
- Adler, J. (1989) : 『Origins of sightseeing, *Annals of Tourism Research*, 16(1): 7-29
- Argent, N. (2002) : 『From pillar to Post ? In search of the post-productivist countryside in Australia. *Australian Geographer*, 33: 97-114.
- Baldock, D. and Beaufoy, G. (1993) : 『*Nature Conservation and New Directions in the EC Common Agricultural Policy*. Institute for European Environmental Policy.
- Bassett, T.J. (1988) : 『The political ecology of peasant-heder conflicts in the northern Ivory Coast. *Annals of the Association of American Geographers*, 78: 453-472.
- Blaikie, P. (1985) : 『*The Political Economy of Soil Erosion in Developing Countries*. Longman.
- Bowler, I. R. (1992) : 『*The Geography of Agriculture in Developed Market Economies*. Longman.
- Bowler, I. R., Bryant, C.R. and Cocklin, C. (2002) : 『*The Sustainability of Rural Systems*. Kluwer Academic Publishers.
- Brklacich, M., Bryant, C. and Smit, B. (1990) : 『Review and appraisal of concepts of sustainable food production systems. *Environment Management*, 15: 1-14.
- Brown, A. (2002) : 『Counting farmers markets. *The Geographical Review*, 91: 655-674.
- Bryant, C. R. (1995) : 『The role of local actors in transforming the urban fringe. *Journal of Rural Studies*, 11: 255-267.
- Bryant, C. R. (1996) : 『Sustainability in action: the role of local actors and interests in the

- transformation and conservation of urban fringe environments. in Sasaki H. et. al. eds., *Geographical Perspectives on Sustainable Rural Systems: Proceedings of the Tsukuba International Conference on Sustainability of Rural Systems*: 67-77.
- Bryant, C. R. (1998) : Community mobilisation and power structure: potentially contradictory forces for sustainable rural development. *Nederlandse Geografische Studies*, **244**: 233-244.
- Budowski, G. (1976) : Tourism and conservation: conflict, co-existence or symbiosis ? . *Environmental Conservation* **3-1**: 27-31.
- Butler, R. Hal, C. M. and Jenkins, J. (1998) : *Tourism and Recreation in Rural Areas*. John Wiley & Sons.
- Cater, E. and Lowman, G. eds. (1994) : *Ecotourism: A Sustainable Option?*. John Wiley & Sons.
- Cavaco, C. (1995) : Rural Tourism: The Creation of New Tourist Spaces, in Montanari, A. and Williams, A. eds. *European Tourism: Regions, Spaces and Restructuring*. John Wiley & Sons: 129-149.
- Cloke, P. (1992) : The countryside as commodity: new rural spaces for leisure. in Glyptis S., ed., *Leisure and the Environment*. *Belhaven*: 53-70.
- Cloke, P. (1996) : Rural life-styles: material opportunity, cultural experience, and how theory can undermine policy. *Economic Geography*, **72**: 433-449.
- Cloke, P. and Goodwin, M. (1992) : Conceptualising countryside change: from post-fordism to rural structured coherence. *Transactions, Institute of British Geographers*, **17**: 321-336.
- Cloke, P., Marsden, T. and Mooney, P.H. (2006) : *Handbook of Rural Studies*. SAGE Publication.
- Comite National de Geographie, Commission de Geographie Rurale (1984) : *Atlas de la France Rurale*. La Documentation Française.
- Dahams, F. (1998) : Settlement evolution in the arena society in the urban field. *Journal of Rural Studies*, **14**: 299-320.
- Davies, W. K D., Townshend, I. and Ng, L. (1998) : The survival of commercial hierarchies: rural service centres in western Victoria, Australia. *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, **89**: 264-278.
- Dearden, P. and Rollins, R. (2002) : *Parks and Protected Areas in Canada, Planning and Management*. Oxford University Press.
- Drummond, I. and Marsden, T. (1999) : *The Condition of Sustainability*. Routledge.
- Essex, S.J., Gilg, A.W. and Yarwood, R.B. (2005) : *Rural Change and Sustainability; Agriculture, the Environment and Communities*. CABI Publishing.
- Everitt, J. and Annis, R. (1992) : The sustainability of Prairie rural communities. in, Bowler, I. R., and Bryant, C. R., and Nellis, M. D. eds., *Contemporary Rural Systems in Transition*, Vol.1. CAB International: 131-141.
- Fuller, T. (1994) : Sustainable rural communities in the arena society. in Bryden, J.M., ed., *Towards Sustainable Rural Communities*, The Guelph Series: 133-140.
- Fuller, T. (1997) : Changing agricultural, economic, and social patterns in Ontario countryside, in Troughton, M. and Nelson, J.G.eds., *The Countryside in Ontario: Evolution, Current Challenges and Future Directions*, University of Waterloo :10-15.
- Green, M. B. and Myer, S.P. (1997) : An overview of commuting in Canada with special emphasis on rural commuting and employment. *Journal of Rural Studies*, **13**: 163-175.
- Grefe, X. (1994) : Is Rural Tourism a Lever for Economic and Social Development?, in Bramwell, B. and Land, B. eds. *Rural Tourism and sustainable Rural Development*, Channel View Publications: 22-46
- Greive, S. and Tonts, M. (1996) : Regulation, land development and the contested countryside: reflections on Bridgetown, Western Australia. *New Zealand Geographer*, **52**: 87-92.
- Halfacree, K. (1993) : Locality and social representation: space, discourse, and alternative definitions of the rural. *Journal of Rural Studies*, **9**: 1-15.
- Halfacree, K. (1995) : Talking about Rurality: social Representations of the Rural as Expressed by Residents of sic English Parishes. *Journal of Rural studies* **11**:1-20.
- Halfacree, K. (1997) : Contrasting role for the post-productivist countryside: a postmodern perspective on counterurbanisation. in Cloke, P. and Littl, J. eds., *Contested Countryside Cultures*. Routledge, 70-93.
- Hall, C.M., Sharples, L., Mitchell, R. Macionis, N.

- and Camboume, B. (2003) : *Food Tourism, Around the World, Development, Management and Markets*. Butterworth Heinemann.
- Hall, D., Kirkpatrick, I. and Mitchell, M. (2004) : *Rural Tourism and Sustainable Business*. Channel View Publications.
- Hanifan, L.J. (1916) : The rural school community center. *The American Academy of Political and Social Science*, **67**: 130-138.
- Hanningan, K. (1994) : National Policy, European Structural funds and sustainable Tourism: The case of Ireland. *Journal of Sustainable Tourism* **2-4**: 179-192.
- Harrison, C. (1991) : *Countryside Recreation in a Changing Society*. TMS Partnership.
- Hinrichs C. C. (2000) : Embeddedness and local food systems: notes on of direct agriculture market. *Journal of Rural Studies*, **16**: 295-303.
- Hoggart, K., Buller, H. and Black, R. (1995) : *Rural Europe: Identity and Change*. Arnold.
- Hungerford, L. (1996) : Beyond sugar: diversification within the primary production sector in the Wide Bay-Burnett Region. in Cryde, D. et. al., *Future for Central Queensland*. Rural Social and Economic Research Centre, Central Queensland University: 27-30.
- Hvenegaard, G. (1994) : Ecotourism: A status report and conceptual framework. *Journal of Tourism Studies* **5-2**: 24-35.
- Ilbery, B. (1998) : *The Geography of Rural Change*. Longman.
- Ilbery, B. and Kneafsey, M. (1999) : Nich markets and regional speciality food products in Europe: towards a research agenda. *Environment and Planning A*, **31**: 2207-2222.
- Jansen-Verbeke, M. and Nijmegen, K. (1990) : The potentials of rural tourism and agritourism. *Problemy Turystki*, **13**, 1-2:35-47.
- Jones, S. (2005) : Community-based ecotourism, the significance of social capital. *Annals of Tourism Research*, **32**: 303-324.
- Kikuchi, T. (2007) : Sustainability of rural space in outer urban fringe of Tokyo metropolitan area: Spirituality and holiness of the Totoro forest. in Bryant, C. R. et. al., *Quality Agriculture: Historical Heritage and Environmental Resources for the Integrated Development of Territor*. FAO: 151-162.
- Kikuchi, T., Oishi, T. and Saitoh, R. (2002) : Recreating of the rurality in the urban fringe of Tokyo metropolitan area: a case study of Kodaira city. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, **37**: 93-102.
- Kikuchi, T. and Yabe, K. (2003) : Development of the arena society and its discontent in terms of regional festival: a case study of Oizumi-machi as Liberdade of Japan. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, **38**: 29-40.
- Kikuchi, T., Obara, N. and Kishimoto, S. (2007) : The Sustainable development of suburban dairy farming: Recreating rurality on the outer fringe of the Tokyo metropolis. in Bryant, C. R. et. al., *Progress in Sustainable Rural Development*, University of New England: 107-114.
- Lane, B. (1994) : What is Rural Tourism? in B. Bramwell and B. Lane eds. *Rural Tourism and Sustainable rural Development*. Channel View Publications.
- Layton, R. L. (1981) : Attitudes of hobby and commercial farmers in rural-urban fringe of London, Ontario. *Cambria*, **8**: 33-44.
- Luloff, A., Bridger, J., Graefe, A., Saylor, M., Martin, K. and Gitelson, R. (1994) : Assessing rural tourism efforts in the United State, *Annals of Tourism Research* **21-1**: 46-64.
- Marsden, T., Murdoch, J., Lowe, P., Munton, R. and Flynn, A. (1993) : *Constructing the Countryside*. UCL Press.
- Marsden, T. (1996) : Rural geography trend report: the social and political bases of rural restructuring. *Progress in Human Geography*, **20**: 246-258.
- McMunus, P. (2001) : *Land of Discontent; The Dynamics of Change in Rural and Regional Australia*. New South Wales Univ. Press.
- Milbourne, P. (2003) : Hunting ruralities: nature, society and culture in 'hunting countries' of England and Wales. *Journal of Rural Studies*, **19**: 157-171.
- Mormont, M. (1990) : Who is rural? Or, how to be rural: toward a sociology of the rural. in Marsden, T., Lowe, P. and Whatmore, S. eds., *Rural restructuring: global processes and their responses*. David Fulton: 21-44
- Murdoch, J. and Pratt, A. (1993) : Rural studies: modernism, postmodernism and the "post rural".

- Journal of Rural Studies*, 9: 411-428.
- Murdoch, J. and Marsden, T. (1995) : The spatialization of politics: local and national actor-spaces in environmental conflict. *Transaction of the Institute of British Geographers*, 20: 368-380.
- O'Toole, K. and Macgarvey, A. (2003) : Rural women and local economic development in south-west Victoria. *Journal of Rural Studies*, 19: 173-186.
- Paquette, S. and Domon, G. (2003) : Changing ruralities, changing landscape: exploring social recomposition using a multi-scale approach. *Journal of Rural Studies*, 19: 425-444.
- Pompl, W. and Lavery, P. (1993) : *Tourism in Europe: Structures and Developments*. CAB International.
- Putnam, R.D. (2000) : *Bowling Alone : The Collapse and Revival of American Community*. Simon and Schuster.
- Roberts, L. and Hall, D. (2001) : *Rural Tourism and Recreation*. CABI Publishing.
- Roberts, R. (1995) : Agency, regional differentiation and environment in rural conflict and change. *Journal of Rural Studies*, 11: 239-242.
- Robinson, G. M. (2003) : *Geographies of Agriculture; Globalisation, Restructuring, and Sustainability*. Longman.
- Rolley, F. and Humpherys, J. S. (1993) : Rural welfare: The human face of Australia's countryside. in Sorensen, A. D. and Epps, R. eds., *Prospects and Policies for Rural Australia*. Longman Cheshire: 241-57.
- Sharpley, R. and Sharpley, J. (1997) : *Rural Tourism*. International Thomson Business Press.
- Sorensen, A. (1993) : The future of the country town: strategies for local economic development. in Sorensen, A. and Epps, R. eds., *Prospects and Policies for Rural Australia*. Longman Cheshire: 274-89.
- Sorensen, T. and Epps, R. (1996) : Leadership and local development: dimension of leadership in four central Queensland towns. *Journal of Rural Studies*, 12: 113-125.
- Takahashi, M. (2001) : Changing ruralities and the post-productivist countryside of Japan: policy changes of the central government in the 1990s. in Kim, K., Bowler, I. and Bryant, C. eds., *Developing sustainable rural systems*. Pusan National University Press: 163-174.
- Walmsley, D. J. (2003) : Rural tourism: a case of lifestyle-led opportunities. *Australian Geographer*, 34: 61-72.
- Welsh, R., Hubbell, B. and Carpentier, C. L. (2003) : Agro-food system restructuring and the geographic concentration of US swine production. *Environment and Planning A*, 35: 215-229.
- Whelan, T. ed. (1991) : *Nature Tourism: Managing for the Environment*. Island Press.
- Williams, A. and Shaw, G. (1991) : *Tourism & Economic Development: Western European Experience*. Bellhaven Press.
- Wilson, G. A. and Rigg, J. (2003) : 'Post-productivist' agricultural regimes and the South: discordant concept. *Progress in Human Geography*, 27: 681-707.
- Woodhouse, A. (2006) : Social capital and economic development in regional Australia: A case study. *Journal of Rural Studies*, 22: 83-94.
- Woods, M. (2005) : *Rural Geography: Process, Responses and Experiences in Rural Restructuring*. SAGE Publications.

Potential Development of Geographical Studies on Rural Tourism with the Adoption of the Research Framework of Food Tourism

KIKUCHI Toshio

Tokyo Metropolitan University, Graduate School of Urban Environmental Sciences

The present paper provides some ideas on the potential development of geographical studies on rural tourism in terms of rural geography. Rural geography approaches to rural tourism turned from the static analysis of actual conditions towards the dynamic analysis of regional changes in relation to characteristics of rural areas. In recent years, with conservation and sustainable use of rural environment becoming leading themes of rural tourism studies, the framework of sustainable rural systems plays an important role in approaches to rural tourism. These trends in rural tourism studies correspond to a shift in the geographical debates on rural areas, away from the framework of productivism, towards that of post-productivism. While economic profit is the driving force of rural development within the framework of productivism, the central elements of sustainable rural development within the alternative framework of post-productivism are the multi-functional use of rural environment and diversity of resources. Geographical approaches to rural tourism, therefore, use the framework of post-productivism for general discussion on multi-functional use of rural environment and resources. The present paper suggests the use of the framework of food tourism as a synthetic approach to rural tourism, which is based on diversity of rural environment and resources. Within the framework of food tourism, the focus is on spaces of rural, agricultural, market, slow food, and gourmet landscape and their respective hierarchy; each space is nested within multi-layer structure from the broad rural space to the specialized gourmet landscape. The space of food tourism is based on traditional, cultural, ecological environments in addition to socio- and economic environments, and is mutually connected with others. As a result, the sustainable development of the whole space of rural tourism is possible, based on the multi-layer structure of spatial contents such as rural, agricultural, market, slow food and gourmet landscape.

Key words: rural tourism, post-productivism, sustainable rural systems, rural restructuring, food tourism